

## 筑波山と萬葉集

筑波大学人文社会系教授

文学博士 伊藤 益

経歴:1986年筑波大学大学院博士課程修了、東北歯科大学専任講師、淑徳大学助教授、同教授を経て、筑波大学人文社会系教授(専攻 日本思想、倫理学)

### 1. はじめに

男体山と女体山の二つの峰からなる筑波山。標高八七七メートルとそれほど高くないため登山しやすく、古くから人々に親しまれてきました。「常陸国風土記」には、筑波山誕生の神話が書かれており、萬葉集には、富士山を詠んだ歌は九首ですが、筑波山を詠んだ歌は二十五首も収められています。この中で、私が、常陸人自身ひたちびとが筑波山を詠んだ歌として特に気に入っている歌を、一首ご紹介いたします。



大穂町から筑波山を望む

### 2. 防人占部広方の歌

橋の下吹く風のかぐはしき

筑波つくばの山を恋こひひずあらめかも

萬葉集巻二十所載、四三七一番の歌です。作者は占部うらべのひろかた広方という常陸さきもりの国の防人。「橋の木陰を吹き抜ける風がかぐわしくかおる筑波の山よ、ああ、そんな山にどうして恋いこがれずにいられようか」という意です。

防人とは、東国の二十歳から六十歳までの男子のなかから選ばれ、唐、新羅の来襲に備えて筑紫、壱岐、対馬など九州西北部を守った兵士たちのことをいいます。「防人」という語は、大化二(六四六)年の詔のなかにはじめてあらわれますが、実際に設置されたのは、天智三(六六四)年、白村江はくすきのえの戦いの翌年のことでした。白村江の戦いとは、百済の救援に向かった大和朝廷軍と唐・新羅連合軍とのあいだに勃発した戦いで、大和朝廷側の敗戦に終わりました。この敗戦をうけて、大和朝廷は九州西北部の防衛を強化しなければならなくなったのです。

防人の定員は三千人で、毎年千人ずつ三月に交

替することになっていました。冒頭に掲げた歌の作者占部広方は、天平勝宝七(七五五)年二月半ばに陸路を通って難波に到着、同月末ごろに海路九州に向かったものと推定されます。

### 3. 防人の旅

防人の任務は過酷でした。東国から九州まで派遣され、そこで敵襲に備えつつ自給自足の生活を強いられたからです。防人に指名された男子は、まず郷村を旅立って国府へと向かいます。国府に集結後、防人部領使さきもりのことりづかいに率いられて、難波へと陸路を歩むのです。武具、武器、食料等はすべて持参。難波への途上では、野宿を余儀なくされました。

常陸の国の防人の場合は、まず国府石岡に集結して、三十日をかけて難波に向かいます。行程はかなり厳しく、病に倒れて途中で落伍する者も多かったと推測されます。落伍することは、多くの場合死を意味していました。当面の歌の作者占部広方おおとものやかもちは、その歌が二月十四日に兵部少輔大伴家持に献上されていることから、無事に難波に到着したと考えられます。

#### 4. 恋の対象としての筑波山

歌は、おそらく、難波に向かう途上で、たとえば、常陸の国の防人たちが野宿の際に催したささやかな酒宴などで詠まれたものでしょう。故郷常陸を代表する山「筑波山」への思慕の思いを表出することによって、故郷との別れを悲しむ情を抒べたものです。この歌については、古来、筑波山を恋人や妻の比喩ととらえる解釈がなされてきました(契沖など)。しかし、「筑波の山を恋ひずあらめかも」と抒べているわけですから、恋い焦がれる対象は筑波山以外の何ものでもないでしょう。占部広方は、常陸野に勇壮としてそそり立つ筑波山を眺めながら、幼時を、そして青春を過ごしてきたのでありましょう。萬葉集の左注によれば、広方は「助丁」という役職者として防人の任に就いております。現在の軍隊でいえば下士官に相当する位です。このことから見て、広方はすでに青年期を終えた年齢、三十歳代半ばくらいではなかったかと推定されます。

三十歳代半ばといえ、妻や子もいたことでしょう。老父母が健在だったとしても不思議ではありません。難波に向かう旅の途次、望郷の念を表出するにあたって、そうした縁者たちへの思いを抒べることなく、あえて筑波山を詠んだことには何か理由がありそうです。おそらく、広方にとって、幼少のころから青年期を経て、日々眺め続けてきた筑波山は、格別な意味をもっていたのでしょう。そう、筑波山は、広方の三十数年間の人生をずっと見守ってきたのです。筑波山は、広方の人生そのものだったといっても過言ではないでしょう。そんな筑波山への思慕は、過酷な任務に出で立とうとする広方の不安や、家族と別れなければな



橘の花

らない悲愁を内に包み込んでいて、深い味わいがあります。

#### 5. 文法上の問題

広方の歌については、文法的に一つの問題があります。それは、動詞「恋ふ」が何らかの対象を取る場合、萬葉集では「～に恋ふ」という形になるのが通例だという点です。たとえば、「君に恋ふ」「我妹子に恋ひつつあらずは」というふうにするのが常識でした。

ところが、広方は、「筑波の山を恋ひずあらめかも」と、すなわち「～を恋ふ」と詠んでいます。常識的に見れば、破格ということになります。ただし、古今和歌集以降の文献では「～を恋ふ」と詠むのが通例で、「～に恋ふ」は例外的な詠み方になります。奈良の都からはるか遠方に暮らす田舎人広方は、無意識のうちに文法的な誤りを犯してしまったのでしょうか。否、そうではありません。広方には独自の意図があったのです。

すなわち、「橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山を」とうたったとき、広方は「を」対象を示す格助詞として使うことをあえて避けたのです。彼は、それを詠嘆の意を籠めた間投助詞的な接続助詞として使ったのでした。この歌を口語訳するにあたって、私が「橘の木陰を吹き抜ける風がかぐわしくかおる筑波の山よ、ああ、そんな山にどうして恋いこがれずにいられようか」としたのはこのためです。当時の都人たちの歌の中に、「を」をこのような意味合いで使う例が数例あらわれる点を考えると、広方の教養が、並みたいていのもではなかったことが知られます。

筑波山は、萬葉の時代から常陸の国の象徴でした。筑波山と言えば常陸国、常陸国と言えば筑波山だったと言ってもよいでしょう。その象徴に向かい合った萬葉の時代の常陸人は、ただ単に武骨で素朴な人々ではなかったことを、広方の歌から窺い知ることができるのではないのでしょうか。彼ら・彼女らは、たをやかでしなやかな感性を備え、都人に劣らず、優美な歌を奏でることのできた人々だったのです。

■この「つくばのシニア人材紹介コーナー」は、つくば市が2008年度から推進している「つくば市OB人材活動支援事業」に登録されている研究者・教育者の方々より寄稿を受けて作成しています。現役を一旦引退されてもいつまでも社会発展の牽引力となって活躍をされている方々の研究実績や業務経験の一端をご紹介させていただくものです。